

春の郊外電車

さききみすえ
佐々木瑞枝

◇ 筆者とヒギンズ先生のもの見方・考え方の違いを読み取る。

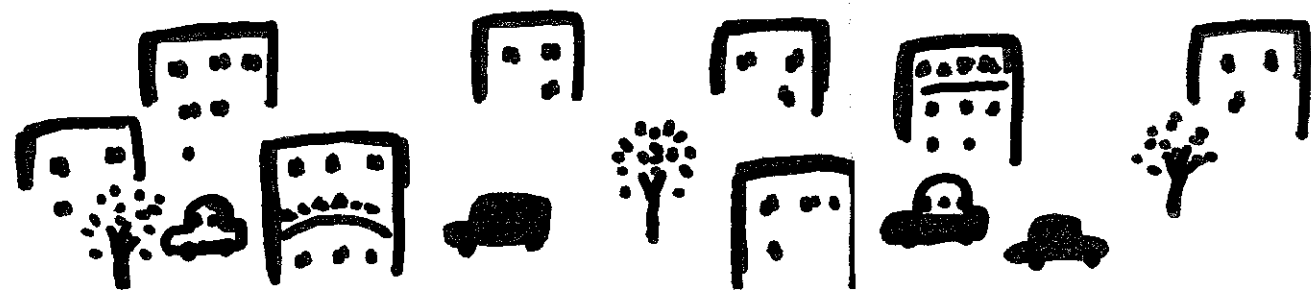
◇ この文章を読んで、感じたことや考えたことをまとめ、発表し合おう。

今朝の電車は、なんという明るさと華やかさに満ちているのだろう。いつもは、通勤姿の男性、女性の押し殺したような沈黙の中で、時おり、停車駅を知らせる車内放送が聞こえるだけなのに。

四月のある日曜日、ペランダに差し込む光の明るさにつられて、郊外まで出か

10

6 華11込



けてみる気になった。もぐらみたいに書斎にこもりっきりの、同僚のヒギンズ先生に声をかけて。

「郊外へお花見ですか……。たまには、それもいいかもしれませんね。書斎の私たちは、四季を告げてはくれませんから。」

日本に来て三年になるイギリス人の彼は、しゃれた返事を日本語で返してきた。どうやら、もぐら先生をひっぱり出すのに成功したようだ。

車内は、お弁当持参の家族連れや、楽しげに語り合う若いカップル、制服を脱ぎ捨てた学生たち、ハイキング姿の元気なお年寄りたちなどにぎわっている。

10

2 僚

2 同僚



と、おばあちゃんとよばれた人が感心したように言う。

ヒギンズ先生は先ほどから、おもしろくてたまらないというふうに、にこにこしながら目の前の家族連れの会話に耳を澄ましている。

「先生、何がそんなに楽しいんですか。一人で楽しんでいらっしゃるなんて、ずるいですね。」

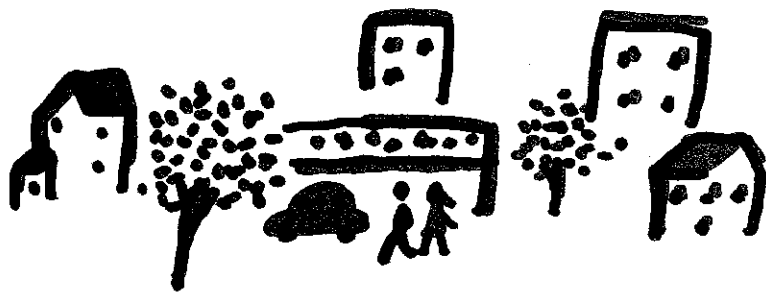
と、からかい半分に小声で尋ねると、

「あのね、今この方たちが話していることを英語に翻訳したら、実に奇妙なことになると思っ……。」

と、英語でひそひそと答える。

10

12 翻
10 …… 半分
12 翻訳



だれもが春という季節の魔法使いに、今日という日を丸ごとゆだねてしまっているかのようだ。

「お父さん、桜は何分咲きでしょうね。」

「お母さん、それは僕にきくよりおばあちゃんにきいたほうがいいよ。僕はだいたい、そういうことにはうといんだ。」

女の人が尋ねると、隣に座る中年の男性がてれたように答える。

「おばあちゃん、僕知ってるよ。あしたは七分咲きくらいで、お花見にちょうどいいって、先生が言ってたもん。」

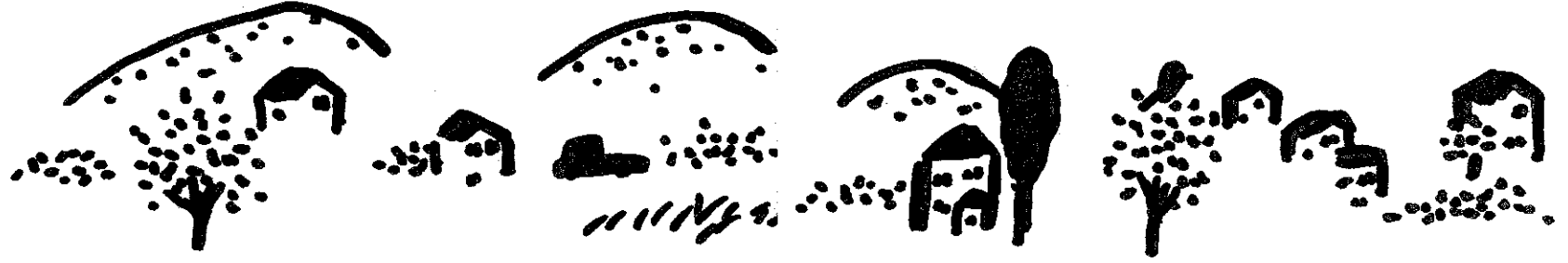
「やっぱり、お兄ちゃんは偉いね。先生の言うこと、よく聞いてる。」

10

何分咲き
開花の程度を示す言葉。五分咲きとは、半分ほど開花した状態をいう。

2 ゆだねる
7 うとい

1 魔¹³偉



はて、そんなに奇妙な会話を、この楽しい家族は交わっていたのだろうか。ヒギンズ先生は、わたしの腑に落ちないといった表情を見て、先を続ける。

「妻は夫をお父さんとよび、夫は妻をお母さんとよぶ。実におもしろい。わたしは初め、彼女が『お父さん』と相手の男性に話しかけたとき、びっくりしたんですよ。彼女の父親にしては、ずいぶん若いなと思って。ところが今度は、彼女のことを『お母さん』ってよんだでしょ。

それで、彼らは夫婦なんだとわかりました。じゃあ、本当の母親のことはなんとよぶのかと思ったら、『おばあちゃん』で

しよ。これをみんな、そのまま英語に翻訳したら、聞いている人は混乱してしまいますよ。」

なるほど、いかにも外国人らしい受け止め方だ。わたしにはごくありふれた光景が、もぐら先生をこんなに喜ばせていたとは。

「日本では、家族のみんなが、子供の立場に身を置いて話すんですよね。子供から見れば、お父さん、お母さん、おばあちゃんは実に自然なよび方で……。」

「じゃ、あの男の子は、どうして『お兄ちゃん』なんてしようね。」
と、ヒギンズ氏。



身になってお互いをよんでいるんですね。日本語は本当におもしろい言葉ですね。」と、ヒギンズ先生。

「先生の書斎にいるより、ずっと楽しい発見があるでしょう。」

と、わたし。

終点まであと一駅だ。車窓にはどこまでも春の風景が広がる。大地は柔らかな緑に覆われ、淡いピンクの桜や濃い黄色のれんぎょうが目の前を通過していく。桜は本当に七分咲きだろうか。

10

れんぎょう
モクセイ科の
落葉低木。早春
に鮮やかな黄色
の花を付ける。

。覆



目の前では、わたしたちがこんな会話を交わしているとは気づくはずもなく、話はお弁当の中身へとはずんでいる。

「今日は、マミの好きな卵焼きをたくさん持ってきましたからね。」

と、お母さん。

「マミ、僕のまで取るんじゃないぞ。」

と、お兄ちゃん。

「お兄ちゃん、妹には優しくしなくっちゃだめじゃないか。」

と、お父さん。

わたしたちは、なぞが解けたとばかりに、思わず顔を見合わせた。

「家族のみんなが、いちばん小さい妹の

10



《筆者》 佐々木瑞枝 一九四〇（昭和十七） — 京都府出身。日本語教育学者。著書に「留学生と見た日本語」「日本事情」「日本語教育の教室から」などがある。

《出典》 本書のための書きおろし。

話し方の工夫——感想を発表し合う

「春の郊外電車」の学習で、「感じたことや考えたことをまとめ、発表し合おう。」という活動に取り組むとき、次のような点に気をつけて、聞き取りやすい「話し方の工夫」をしよう。

1 事前の準備として

- (1) 発表の内容を整える。
- ・ 幾つもの感想を並べたててのてなく、なるべく話の焦点（しんてん）をしぼる。

- ・ 結論だけを述べるのではなく、そう考えた理由やその考え方を裏づける具体例など、しっかりした根拠をそえる。
- ・ 持ち時間を頭に置いて、話す事柄を取捨選択する。
- ・ 図や表、あるいは、録音したもの、録画したものなど、発表の際に生かせるものを用意する。

(2) メモを生かす。

原稿を書くのはよいが、発表の際に、それを暗唱したり読み上げたりするのは、生きた話し方にならない。むしろ、心覚え程度の

簡略なメモを用意し、それを手にしながら、そのとき、その場で言葉をつなげ、文を組み立てるのがよい。

そのためには、どういう形のメモにまとめるのが効果的で話しやすいかを、それぞれに考えて試してみよう。話すとおりの原稿を書いた人も、それをメモの形にまとめ直して、メモに基づいて話すようにしよう。

2 実際に話すときに

- (1) 話す場所や場面、聞き手の人数などに合わせて、声の大小や強弱を考える。
- (2) 聞いただけではわかりにくい言葉や同音異義語などは、なるべく使わない。
- (3) 一つ一つの文を短めにして、なるべくわかりやすい文の組み立てにする。
- (4) 話全体の展開も、わかりやすくする。

《新出漢字》

12 華 はな	12 込 こめ	13 僚 リョウ	14 魔 マ
栄華	見込み	官僚	魔力
14 偉 エイ	15 翻 ホン	19 覆 フク	
偉大	（ひらがな）	（くっかえす）	
	翻案	覆面	